

全電源喪失の記憶

証言 福島第一原発

■第5章「命」

福島第一原発事故で現場の指揮を執った吉田昌郎は食道がんを患い2

01年12月、所長を退いた。退任

後、東工大の同窓会から第一原発

所長を務めた東京電力の先輩、一見

平凡にメルを送った。

「後世に伝えなければならぬ」

とがあるので、もう少し生きてみよ

うと思えます」

吉田は何を伝えようとしたのか

。吉田は事故翌年の12年2月上旬、

東京都新宿区の慶応大病院で手術を

受けた。術後の抗がん剤治療が続く

中、事故対応で感じたことを周囲に

語ったことがある。

「俺は見えていただけなんだよ。故

17

吉田所長 作業員に感謝



俺は見えていただけ

射線量が高い地獄のような現場に向

回も行って、くれた連中がいたんだ。

彼らが一生懸命やってくれたんだ

よ。本当にありがたいと思ってる。

俺は何もしていない。何もね」

真つ暗な中央制御室に残った運転

員、車のバッテリーをかき集めて計

器が読み取れるようにした復旧班

員、消防車による原子炉への注水を

するために何度も現場に向かった自衛

消防隊員、電源復旧作業中に爆発に

巻き込まれた電気設備担当。

吉田の脳裏には、決死の思いで作

▲廃炉作業が続く福島第一原発。構内には汚染水を保管する地上タンクが無数に立ち並ぶ。2月

業に当たった社員や協力企業の作業

員たちの顔が浮かんでいた。だから

こそ首相官邸や東電本店、アスコミ

報道には腹が立った。

部長だった時の部下と人で、散苳

「現場は知恵を出してやってやっ

ているに、何かのスィッチを押せば

できるんじゃないのかみたいな感覚

を集めて飯でも食うか」

「お酒は駄目ですよ」

ねえよ、そんなこと言っちゃっ

ちに来い』と思っただね」

免震重要棟で現場の作業を見守り

ながら吉田は「一人も死なせるわけ

にはいかない」と、現場の安全を儻

先した。

「事故が起きたら最初に死ぬのは

誰でもない発電所の人間なんだ。だ

けど死んでしまったら事故の収束が

できない。現場の人間の命を守れな

い、地元の人たちの命を守るわけ

が判明した。

吉田は12年6月に慶応大病院を退

院し、東京都内の自宅で療養するこ